

夏の太陽の下で

寺島ゆり

七月の太陽は、朝から強烈な光を大地に送り届けてくる。はつきりとした光と影が、あちこちに作られ、時間と共にぐんぐん気温があがる。小田急電鉄が経営する大きなプールの一角で、良子は夏の間その小さな小屋の主として働く。

場所は遊泳禁止の鵜沼海岸の砂浜である。

毎年夏になるとこの小屋で、雑多な食べ物売っている。

アイスクリームクレープ、フライドポテト、アメリカンドッグ、かき氷その他。

数人のアルバイトと一緒に六月下旬から九月上旬まで続ける。

プールは遊園地風に作られ、子供達の楽しい遊び場になっている。

朝小屋に着くと、二つのフライヤーに火をつけ、また二つのクレープ台にも点火する。その後小屋の裏側に作ってある物置の中の冷凍のストッカーから、アメリカンドッグやポテトを取り出す。アイスクリームのケースは小屋の中に入らないため、外に置いてある。鍵を閉めテント用の生地で縫ってもらったカヴァーを被せてある。このアイスクリームはとかくトラブルの種を蒔いてくれる。去年ちよつとした事があったが、それがもとで今年も一悶着始まる事になってしまった。後ろ側には、コンクリートの堤防のような頑丈な塀があつて、その上にフェンスがある。その向こうは砂浜に続く荒海が広がっている。この辺りは昔から波が荒い。

プールは一三四号線にそつた所にある。かつて此処は砂浜であり松林だった。塩害がひどいと言う理由でか、住宅はかなり奥まった所にあつた。良子は時々あの頃の静かな道を目指し出す。車が全然通らなかつたこの道路で、テニスをしたり、ドッチボールをしたりした。自転車に乗る練習もした。あれからすっかり変わってしまった騒がしい今をつい嘆きたくなるものの、今では大量の車が通り、プールへの客も運んできてくれる。おかげで小さな小屋ながら活気に溢れた商売が出来ている。

仕事に夢中になっている時、ずっと向こうから苦虫を噛み殺したような顔の男がやって来た。副支配人である。その姿に良子は不快な予感を抱いた。支配人はもつと江ノ島寄りにある鉄筋コンクリート建ての海の家シーサイドパレスにいて、プールは副支配人が任されている。支配人も副支配人も二年か三年で転勤になるからそう長くは居ない。

「リリーさん、ちよつと事務所にきて下さい」

リリーとは良子の店の屋号である。副支配人はそう言ったまま、返事も聞かず無表情に去っていった。昼の休憩時間になる直前の一番多忙な時間である。プールでは一時間おきに十五分間の休憩時間を設けている。昼休みだけが三十分。夏休みになるとプールは足の踏み場もない程人がはいる。屋根付きの休憩所は早々埋まり後は所かまわずシートを敷いて皆が寛いでいる。小屋の外に出ると海からの風が青く冷たい。降りそそぐ太陽の熱気の下で、良子は一番頼りにしている女性の脇坂に声をかけた。

「揚げられる限りみんなポテトを揚げちゃってね。アメリカンドッグもまだ足りないから揚げておいて、急いで行って来るからね」

あとは言葉に出さない。この多忙な時間を狙って呼びつけるなんて、営業妨害よと腹を立てながら思うのみ。辺りの客を右によけ左によけて、彼女は事務所まで行った。広いプールの敷地の一番奥から、入り口の側の事務所まで距離は遠い。

副支配人の用件とは、アイスクリームのことである。アイスクリームの件で今年も厄介な続きを演じなければならぬようだ。

「リリーさんテナント会議で、今年はアイスクリームは売らないと約束した筈ですよ。ね。売らないと言いながら、売っているじゃありませんか。どうなっているんです」

「私売らないなんて言ってます」

「支配人が売らないようにと指示した筈ですよ」

アイスクリームの件は去年の夏に保健所の人が無意に見回りに来て、不衛生だと、一言言った。五六年前から売り続けてきたものだが、最初のころは、屋根に代わるものと、ビーチパラソルを立ててみたのだが、すぐ後ろが海なため時々突風があるのだ。パラソルを立てるための重たい台を用意して立てたが簡単に抜けてしまい、パラソルだけ飛んでしまう。パラソルは風の向くまま風に向くままに、人ごみの中に突っ込んでいく。危なくて立てられない事が分かった。他の方法で屋根をつけるにはかなり頑丈にする工夫が必要で、つい剥き出しのまま売る事になってしまっている。雨の日はプールに客が入らないから力ヴアーを掛けたままにしておけばよく、不自由な事は何もなかった。

良子の親しい友人に、県会議員をしている女性がいる。何でも気楽に頼んだり頼まれたしている間柄なので、アイスクリームの件は、彼女に依頼してみた。

「もう五六年前から売っているんだから、これからも売れるように指導してくださいって電話を掛けてくださらない。」

ただそう依頼しただけの事である。電話は早速掛けてくれたようだ。

「指導も何もなかったわ。そのままどうぞ今まで通りお売りくださいですよ。変ね」

彼女の言う変ねは県会議員が電話を掛けたからそのまま売っていいと言う事で、良子も変なのと思ったから、支配人にも副支配人にも言わなかった。

この年始めてのテナント会議の時には

「リリーさん、去年アイスクリームの事で注意されたから、今年は売るのはやめな」支配人に言われている。

「私、保健所に行つて相談してきます」

その時は、まだ保健所に依頼していなかったからそう言ったが、何とかして売れるようにしようと思っていた。

「保健所では、売っていいとの了解をとってあります。それにケースに一杯仕入れてしまったので、あれを捨てるわけにはいかないんです」

「うちの方には、保健所から売っていいという連絡は来ていませんよ」

「小田急さんの方には、連絡は行かないとおもいますよ」

良子は部屋の一角に用意してある来客と話し合うための椅子とテーブルの所に居た。一刻も早く小屋にもどつて仕事をしたかったから、喋りながら立ち上がっていた。副支配人は、べつに意地の悪い顔もしていない。やぼつたくて知性のない顔つきだけど冷たくもない。そのやぼつたい彼の顔つきを観察しながら、何となくいじめの心理に違いないと内心で断定した。

部屋の一角にチケット売り場があつてアルバイトの女が二人窓口の方を向いて腰掛けている。部屋の中央には、机が向かい合つて八つ位あつたが、そこで事務をとっている男は、何時も一人か二人である。この日も一人だけだった。あとはプールの見回りその他で外に出ているらしい。

「もうすぐ休憩時間なので失礼します」

本当に失礼な態度だったが良子は焦っていた。作る事、売る事それら総ての点において良子はだれよりも優れているつもりでいる。だから早く戻らねばならない。急がない事

だから夕方呼んでくれれば仕事に差し支えがないのに、と憤りを感じていた。

去年の夏のある朝、小屋に来るとブレイカーが下りているのに気がついた。冷蔵庫をあけたら、妙に温かかったのだ。ハツとしてアイスクリームのストツカーのカヴァーを取り除いてみたが、案の定アイスクリームは融けていた。夕方プールの営業が終了すると監視員がプールの底を掃除する。その時に使う掃除機の電気は何時も良子の小屋の外側にあるコンセントにコードを差し込んで使っているのを良子はしっていた。広い水底の砂を吸い取る強力な道具である事から電気の使用量が多いのかも知れない。プールの季節が終わってから、翌年の夏までには、何時も水を抜いたプールの底に大量の砂が溜まっていて、底を三分の一程埋めてある。この砂の量を思えば、毎日浜から風に乗ってやってくる砂が、かなり水底に溜まっていくのは当然のことと言っていい。

「ブレイカーがおりたまま一晩置くとアイスクリームが全部融けてしまうんです。そんな時は、小屋をあけてブレイカーを戻してもらわないと困るんです」

副支配人にその時も伝えたが無視された。見向きもせず返事もしない。一度言っても駄目なので二度三度言ったが聞こえない振りなのか返事がない。が隣の親父さんにはぐづくぐいいつたらしい。

「リリーさん電気くらい使わせておいたらいいよ。幾らでもないんだから。それよりここで気持ちよく働けるほうがいいじゃないか」

一つ二千四百円するアイスクリームが、八種類入っている。予備もいれてある。これをデイツシャーですくって売っているので、全部融かしてしまうのは痛手である。

「電気代はいいのよ、アイスクリームが融けるのが困るのよ」

と言いながら、ストツカーの中身の事を話した。その点では分かってくれたようだ。

隣では、焼そばとおでんがメインで、あと焼き鳥、わた菓子などを売っている。このプールのテナントの中では、一番の古株である。

副支配人はその後パートさんを捕まえて、下水道の料金を払ってやっているんだから、電気くらい使わせてくれたっていいじゃないか。と言ったそうだ。良子の意向など伝わってはいないらしい。こんな簡単な言葉が通じないと言う不思議にさえ思われる事態ではあったが、今年も又この言葉の通じない男と対話しなければならぬ事態になってしまったようだ。

小屋の熱気があまりにひどいと、裏に出て風に当り一息つくのが何時もの慣例になっている。どんなに太陽の熱気が強くても、海のかぜは常に冷たい、海がこれほどの冷氣

を送ってくれるとは、その時まで気付かなかった。

数日後、副支配人が溢れる熱気の下をけだるい歩き方をしながら歩いて来るのが見えた。良子呼びに来たのだ。時間もまた昼休みの少し前である。

「ちよつと事務所に来て下さい」

そう言ったまま、返事をする間もなく去っていった。この忙しい時間にそう度々呼ばれてはたまつたものではない。良子は副支配人の後姿を見てそう思った。仕方なくアルバイトの学生に伝言を依頼した。

「昼は忙しいから、三時過ぎに行きますっていつてきて」

アルバイトの学生が一人居なくなつても本当なら困る程に忙しいのだが、すつぽかすのもまずい。ポテトは油で揚げても、二百円づつ分小さなケースに詰めなければならぬ。ハンバーガーはパンを焼いてバターを塗りレタス、チーズ、ハンバーグを挟み、袋にいれる。皆が泳いでいる間にそれらの準備をして、休憩時間には一斉にやって来る客に、全員が販売態勢になる。休憩時間の後は、客に勝手に使ってもらつたために小屋の前に置いてあるテーブルの上のソース、ケチャップ、からし等が、みんな空になっている。それらも補充しておかないと、黒山に人だかりがしている休憩時間中に

「おばさんケチャップがないよ」

とアメリカンドッグを片手に、もう一方の手に空き瓶を持ってきて差し出す。瓶の中にとろとろとした赤い液体を注ぎ込む時の、そののろのろした流れ方へのもどかしさは、骨身に染みるものがある。

三時を過ぎた頃、良子は事務所に行った。

「リリーさんアイスクリームを何時まで売るつもりでいるんです。テナント会議で売らない約束をした筈ですよ」

予想通りだった。

「売らない約束はしていません。保健所の方も了解をとりました。保健所がいいといったのですから、このまま売ります」

「保健所で言いつつたとしたら、うちの方にも連絡がある筈です。何もきていません。売らないと言いながら、売っているんですから、他のテナントにも謝罪に行つて下さい。仕方がないから一緒に廻つてあげます」

プールサイドの小屋は全部で五つある。それ以外にはロッカー屋水質検査と貸し浮き輪屋、監視員等がテナントに加わっている。この忙しいのに、アイスクリームを売らないと

いつたのに売っています、申し訳ありません等と言って、各テナントを廻って歩いて、他人の店のアイスクリームの事など、誰一人気にしてはいない忙しい最中に何つまんない寝言を並べているんだらうと、笑うだけに違いない。副支配人の良識もわからなかったし何故此処まで集中攻撃を受けるのか理由もまるきり分からなかった。

二三日たって、又良子は呼び出され同じ繰り返しをやっていた。がその日は何時もと事情が違っていた。事務所には三箇所にドアがある。一つは直接プールに出られるドアで、一つは入場者達のためのロッカールームに続いている。もう一つのドアは外からの入り口である。そのドアがいきなり開いて、シーサイドパレスに居る支配人が入ってきた。彼はまるで副支配人と良子との会話を知っていたかのように言った。

「リリーさん、アイスクリームは売っていいよ。保健所は売るなども何とも言ってこないからね」

思いがけない助け舟だった。

午後五時にプールの営業が終了すると片付けを終えて、良子はプールからやや離れた所に借りてある駐車場へ行く。途中に高校の後輩が経営している喫茶店がある。ティールームすみれと書かれた看板を見ると、毎日引き込まれるように立ち寄ってしまう。その日は、珍しく客がいなかった。二階建ての白くて愛らしい建物だが、内部もまた総て白い。壁、窓枠、ドアなど白づくめで、置いてあるピアノまでが白い。珍しく人気のない店の中で、カウンターに腰掛けて、良子はその日の出来事をはなした。

「その副支配人の心理って、所謂いじめなのかしら。それとも去年の続きかしらね」
すみれさんは去年の事を覚えていてそんなことを言ったが、良子にはよく分からなかった。

「あそこのテナントは皆男だから、いじめるならたった一人の女のオーナーは、一番いじめ易いかも知れないわね」

コーヒーに砂糖を入れず、ミルクだけいれて白いコーヒーカップを口元に持っていきながら、良子は考え込んでしまった。この店の常連客は、定年退職した男がおおい。

「うちのお客さんで、第二次大戦の時、軍隊に入れられて、理由も分からないけど、突然上官に殴られたって話はよく聞くけど。人間って何処かで発散したいんでしょうね。そんな時立場の弱い者が対象になるのよね」

「発散したい気持ちは分かるし、人間には必要な事なんでしょうけどその対象に選ばれるのは迷惑な話よね。本来人間というのは、不気味な生物なのよね。いじめられていた

り、困っていたりする姿を見ると、気の毒に思う反面、快感を持つ所が誰にでもあると思うの」

何時も暇なおじさん連中で埋まっている店なのに、この日は何故か誰もこなかった。すみれさんは自分のコーヒーを入れて、良子の隣に腰掛けて喋りだした。

「子供の頃、友達がいじめられているのを見て、いい気味だと思った記憶があるわ」

「私は無意識に人を傷つけた事は、無数にあると思うけど、意識的に意地悪をした記憶はないのよ。案外親切な役回りはするの。だからといって本心からの優しさなんてものとは思えないの。そんな所で優越感を味わっていたり、いい気味だつて言う心理は優越感の裏側で働いているわ。それを汚い根性だなんて思っていない。剥き出しにした人間の姿だとおもっている。誰でも本心は表に出さないけれど、それが人間なのよね。現実には私には出来ないひどい事をやってのける人だっているんですものね」

すみれさんは、急に思い付いたように、にやつと笑いながらいいだした。

「副支配人にはニッコリ笑ってたまには料理屋に誘ってみたら、どうでるかしらね」

今の多忙さでは実現不可能だが、良子は一緒に食事等する気にはなれなかった。

「それよりお塩がたっぷり入ったコーヒーを飲ませてやりたいわ」

何時も海の青は、灰色を混ぜ合わせたような色をしている。真夏の空は強烈に青く輝いている。灼熱の太陽のした、海からの冷たい風のもで、汗を拭いながら終日フライドポテトを作つては、小さな器に詰めたり、ハンバーガーを作つたり、クレープを作つたり、かき氷を作つたりと同じ繰り返しの日々がすぎて行つた。一時間おきに来る休憩時間には、小屋の周囲に黒山の人だかりがして、作り貯めした商品が、瞬く間にきえていく。客は小学生、中学生、高校生のほか、若い大人達。若い熱気が立ち昇る。

あの日以来平穏な日が続き、副支配人には合うと

「おはようございます」

と声を掛ける。だが彼は聞こえない振りをしてうつむきかげんに前方を見たまま通り過ぎて行く。そんな人はほかに居ない。ここで働く若いアルバイト達は、会社の方針が行き届いてか、皆気持ちよく声を掛け合う。おはようございますか、お疲れ様ですか、そのどちらかであるが、無言ですれ違う事はしない。ただその二つの言葉と笑顔で人々の雰囲気は何時も明るい。

四五歳の子供がアイスクリームをかいにきた。アルバイトの青山がディッシャーを使ってコーンの上にアイスクリームを載せてわたしたが側についていた母親が声をかけた。

「落とさないようにしなさいよ」

アイスクリームを持って、そっと歩きながら子供がそれに答えている声が聞こえてきた。「落としたり又買えばいいじゃないの」

アイスクリーム係りをかけて出ている青山が、ディッシャーを洗いながら手放しでわらっていた。良子は子供の口から、そのような言葉が出てくる事に、異様な驚きを感じながら渋い笑顔で眺めていた。良子の小学生時代は第二次大戦の最中だった。アイスクリームも、チョコレートもその他あらゆる菓子類は何処を探しても売ってはいない。あの頃のひもじさが、ふっと頭をよぎった。

此処では良子と脇坂だけが中年を過ぎたおばさんである。あとは皆学生のアルバイトばかり。脇坂は何時も窓の外に立ってポテトをパックに詰めている。庇の下の日陰で海からの風が当る特等席である。若者たちは小屋の中で、二つのフライヤーにひっきりなしに網の器ごとポテトを入れて揚げたり、合間をみてアメリカンドッグを揚げては、正面のガラスケースの中に並べている。クレープを焼くのは別のアルバイトがこれも一日中焼けている。時々彼等の中の一人が、一息つくために「あっーい」と声をあげて小屋の外に出るが、すぐ戻って来る。後は黙々として働き詰めにはたらいている。

プールは、西の端に五十メートルプールがあり、中央には子供用の変形の浅いプールがある。中に子供向きの滑り台があつて、幼い子供が遊ぶのに手ごろな水深だが、かなりの広さがある。東側にはこれも変形の小学中級以上から中学生があそぶ特大のプールがある。此処にはとても高い所から回転しながら滑り降りるタイプの滑り台がある、上から水が流れ落ち、その流れに乗って滑り下りるスリルが素晴らしい。

すでに夏休みに入っていて五千人前後の客が入るようになっていた。毎日が活気に溢れ人の声、海のざわめき、国道一三四号線を走る車の騒音が入り混じった音の中で、一日が始まり、そして終わる只管明るさの中にありながら、時に頭上を飛ぶ低空飛行の小型機の音が一際高く響く時は、皆が暗い予感を持って海を眺める。一夏に一度か二度あるこの光景はサーファーが行方不明になった時の搜索の音である。この日も三人の仲間であつて来たサーファーの一人が、沖へ流されて行方が分からなくなったとの事だった。そんな時皆が見知らぬ人の事ながら不吉な予感に怯える。良子が若かった頃は、サーフィンはな

かった。その頃もこの辺りの海は遊泳禁止になっていたが、威勢のいい若者が大きめな板切れ

を持って来て、波乗りをしていた。この遊びはさすがに夏だけだったが毎日幾人かの姿が見られた。良子が泳ぐ場所はこの鵜沼の海よりずっと江ノ島寄りで、遊泳禁止にはなっていない場所だったが、人気が少なかった。水が何処までも透明で、自分の身体が人魚のようだと、海の水の美しさに感銘を抱いたものだった。水の底に沈んでいる貝がすぐ手の届く所にあるような気がするが届かない。水深が上から見ても分かりづらかった。あの頃も今も、水の犠牲者が夏毎にでるのを止める事は出来ないままである。太陽の恵みの裏側にある闇の部分と我々は共存しなければならぬようだ。

この日の人騒がせな事件の結果は、流されたサーファーが江ノ島に辿り着いた事がわかって決着した。そんな時、不吉な予感から開放されて、一気にほっとするのが常だが、結果が呆気ない分だけ、がっかりもする。誰一人未知の若者の遭難を期待して居た訳ではないの。

アイスクリームの件が収まった後は、多忙だが平穏な毎日が続いた。このまま夏の終わり迄穏かな日々が続く気がしていた。だが本当はプールの裏の砂浜に寄せては返す波のように、穏かな波が寄せて来る日もあれば凄まじい高波が寄せて人をさらって行く日もある。あれと同じ事がプールの中の人間関係でも続いているのだ。

七月の終わりに、良子はプールの仕事を一日だけ休むことにした。正確には午後のみなのだが。午前中は市場に行つて必要な物を買ひ揃えてプールの小屋に運ばなければならぬ。それが終わってから、脇坂に仕事を任せて、夏の間のため一回の休みをとった。月末の支払いその他で、銀行に行く用事も自宅の冷蔵庫を満杯にする事も皆この日のうちに駆けずり回つて終わらせた。手抜き連続だった食事の支度をこの日は少しばかり余計に手をかけた。支度は夫と二人の息子との四人分の準備である。その最中に電話のベルが鳴った。相手は脇坂である。

「大変なのよ。私震えちゃったわ」

まず発した言葉がこれである。何の事やらさっぱり分からない。思えば彼女らしい表現でもある。働き者で慌て者で、正直者だが、落ち着いて物を考える人ではない。何から喋るべきか考えてみる事もしない。そんな所が良子にとっては信用できるタイプでもある。

「何が大変なの」

「おつり銭を入れる箱を蓋と身を重ねてあったでしょ。あれなのよ」

「それがどうしたの」

つり銭箱はカステラの箱をつかっている。蓋をする事はなく、実の方は四つに仕切つて小銭を分けて入れ、蓋は実に重ねてある。

「何気なくつり銭箱の蓋をとったのよ。そしたら中に千円札が二十枚隠してあったの」
海やプールの店では金のトラブルが多い。それにもかかわらず、そんな手癖の悪いのが居る事を疑つてみなかった。

電話を切つた後、良子は犯人が誰なのかをしきりに詮索した。脇坂もその日は犯人の詮索に余念がなかったらしい。良子はいくら考えても何時もクレープ台の前にいる石上孝子以外、あの箱の中に金をいれられる立場の者はいない気がした。つり銭箱はクレープ台の横に置いてある。売上金の札は別の場所にしまふ。その夜のうちに、脇坂に電話をかけたが彼女の意見も同じだった。良子はその夜電話をかけて石上を辞めさせた。理由は人手が余っているから。あまりに見え透いた嘘だった。

この夏の天候は灼熱の太陽が惜しげなく降り注ぐ日々が続いた。絶え間なく汗を流し冷えた麦茶を飲みながら雑然と何かに追われる一日がはじまり、そして終わる。

石上を辞めさせた翌日石上の親友の安川が辞めると言つて来なくなった。理由は、石上に無実の罪を着せたとの事良子は止めなかった。感が働いて二人が通じ合っている事に気づいたからだ。脇坂を除けばあの二人は一番役に立っていた。痛手ではあるが、その夜電話をかけまくつて欠員を補充した。あとは何の変哲もないかのような状況にもどつた。

石上を辞めさせた翌々日の夕方、石上と安川とその他去年この店にアルバイトで働いていた坂上という若い青年とがやって来た。もちろん辞めさせられた事に抗議するためである。辞めさせられた理由が隠してあった金である事は脇坂が発見した時、石上が目の前に居たのだから言わなくても彼等はわかつていた。が石上は金の事で自分を辞めさせたのかと一応確認してから言った。

「お金の事なんて私は知りません。アルバイトはこつちにも都合があつて、今ごろいらな
いなんて言われても半端なんです。夏の終わり迄働くつもりで来たんですから」

石上がそう言うのに続けて安川が

「だいたい証拠もないのに、勝手に石上さんのせいにするなんて、随分汚いやり方ですよ」
「皆アルバイトをする必要があつて来ているのに、濡れ衣を着せて夏の途中で辞めさせる
なんて酷すぎますよ」

と、坂上が付け足して言った。

「坂上さんはこの事には関係ないじゃないの。何のために来たのよ。あの子達をかばって何か得する事でもあるの。濡れ衣だの、証拠がないだのって、何であの箱の底に金を隠しておいて、ずうずうしい事を言うのよ。給料のほかに二万円づつ毎日余禄が入るなら、誰だって辞めたくないから、つべこべ言いに来るんでしょうけど、盗られるほうは、そんなめられてばかりはいられないわ。そんなの見つけ次第辞めさせなくちゃ、こっちが破産するぢやないの」

「箱の底にお金を隠したのが、石上さんだなんて、何の証拠もないのによく言えますね。失礼にも程があるわ。石上さんがしたって言うなら、どんな根拠があってそう言うのかちやんと説明して下さい」

安川が怒付いていた。

太陽は西の空に傾きはじめているが、まだ日差しがつよい。白い雲の合間から幾筋もの直線の光が大空を八方に長く伸びている。あの空の高みから眺めてみると、二十枚の千円札のために、齒をむき出していがみ合う人の姿は、どのように見えるだろうか。面白い醜いか、こんな一こま一こまが、つまり人間の剥き出しの姿であり、人間そのものと呼べるものなのに違いない。

「太陽が眩しいわね」

良子はニヤニヤ笑って言った。

「茶化さないでください」

と石上。

「言つてもいいのなら、言つてあげるわ」

と良子は、余裕をみせて言った。

「当然です。言つて下さい」

石上は本気で自信があり、かつ辞めたくない気持ちでいる様子だった。

「つまり小田急の人が見回りに来た時に偶然見たのよ。だから箱の底を調べなさいって注意されて、脇坂さんがさり気なくあけてみたって訳よ」

良子の即席に作った嘘である。内心ではうまい事を言ったものだと感じた。がこれが後で又ひと悶着起こす事になるとは予想しなかった。石上達は取り敢えずこの日は此処をひきあげた。がこの雑収入の多い職場を離れる事を何とか食い止めたらしい。それが出来そうに思える程に良子は甘く見られているようだ。

八月に入ると海は徐々に徐々に穏かさを失い波が高くなりはじめ。日を追う毎にくらげも増えていく。七月の穏かだった海が遠ざかって行くに従い、プールに入る客が増えていく。お盆休みがピークで凄まじい量の仕事をこなさなければならぬ。夕方にはさすがに若いアルバイトの学生までが、くたくたに疲れて僅かばかりの休憩をしてから帰って行く。良子も毎日くたくたに疲れはてるが、ここには捨てがたいパワーが漲っている。小学生から高校生まで、その他若いお父さんお母さんと幼い子供達など、若者が集う場所なのだ。ここでの仕事は良子の生き甲斐につながっている。

仕事のうえで申し分ない戦力になっていた二人の女子学生と、もう一人の仲間との合計三人を辞めさせてしまった事で、盆休みの多忙さを思うと、不安が募った。

海の家でアルバイトをする者にとって共通した意識があると聞いていた。つまりいちどきにドバツト客が来ると、金の整理がつけにくく、その間に巧く掠め取る。それをしないのは勿体無い話だというのが、彼等の間では常識になっているらしい。真面目に働いているのは馬鹿らしい事とされている。これはプールでも同じ事である。真面目で正直に働く人が大勢いる事は事実だが、手癖の悪いのも又夥しい数にのぼるようだ。彼等には罪の意識などみじんもない。

人は集団で行動する時、考えないのか合法的と錯覚するのか、善悪を問わず共に行動をするものらしい。これが人の習性であれば、逆らうのはかえって複雑な心境になるのかも知れない。その日もテイルームすみれに立ち寄った。意外にも混雑していた事で長くは話せなかった。帰宅途中、心を悩ます盆休みの多忙さについては、ただひたすら人の二倍働こう三倍働こうと思う外何も名案はうかばなかった。が慣れない新しいアルバイトと共によつていくしか仕方がないと思うと気が重かった。

いささか赤みがかかった青空の下にぽっかり浮かぶ白い雲が金色に輝いている。ひんやりとした潮風が頬をなでて通る。無限に深く広い空の下で自然の佇まいは美しすぎる。店の金をこそ盗む者達が汚水にまみれたものに見えたり、腐った生ごみに見えたりしながら、反面、自分が彼等の立場に立った時、同じ事をしないとはい切れないと気づくには時間はかからなかった。

翌日になって、早速副支配人が例の顔つきでやってきた。

「リリーさん、お宅で働いていたアルバイトの女の子が、何も悪い事をしていないのに辞めさせられたって泣いていたよ。金を隠して居る所を私に見られたために辞めさせたと聞いたそうですね。明日三時に事務所に来てください。あの子達を呼んでありますから、

そこで私は金を隠す所なんか見ていないと、はつきり言います」

この時に限って、多忙な時間を避けて、三時の休憩の後の、いささかほっとする時間にいってきた。良子の返事を待たずに

「三時ですよ。必ずきてくださいよ」

それだけ言って帰って行った。良子の返事など待つつもりは、最初からない様子である。良子の心を最初によぎったものは、困ったの一言だった。がここは何とか乗り切るしかない。又戻して働かせる気など毛頭なかった。事務所で働いている小田急の人というのはいく人いるのだから、何も副支配人が見てなくても、他の人が見た事にして頑張れるだろうか。それは副支配人がいちいち聞いて歩いたけど誰も見ていないようだと言い出すかも知れない。

濡れ衣を着せて辞めさせる形になるのはまずい。が、証拠がないのは事実なのだからそれを前提に辞めさせる手立てを考えなければならない。ざっと一時間余り良子は困りきった思いで考え続けていた。

その日の売上金を計算して、釣銭を残し伝票を書く。これが毎日の良子の夕かたの仕事なので、それをし、袋に伝票と金を入れた。伝票には一万円札の枚数、千円札の枚数、百円玉、五百円玉その他、詳細に記入する。これを持って事務所に行き、会計係りに渡すと、会計係りは改めてこの金を持参した者の目の前で確認のため計算する。終わったら元に戻して、そのまま銀行に渡すことになっている。良子は計算して袋に入れる迄はするが、事務所に届けるのは、誰かに頼む事が多い。金の計算が終わると、あとは片付けである。その日良子は最後の片付けを皆にまかせて帰途についた。

海岸線に沿った国道一三四号線に平行した一本内側の道を車で江ノ島の方角にむかった。「手癖の悪い奴を見つけたら即刻辞めさせなきゃ駄目だよ」と言っていた隣の店の親父を思い出しながら、これがあの親父の立場だったらどんなだろうと思った。あの副支配人の口出しなどあり得ないだろう。辞めさせられた方も一喝されて終わり。多分そんな所だろうと想像しているうちに曲がり角にきた。曲がって海岸線に出るとすぐ目的のシーサイドパレスの大きな建物がある。ここで支配人に相談するつもりでいる。多くの客が帰った後のがら空きになった広い駐車場に車を止め、建物の中に飛び込んだ。何時も事務所にいるはずの支配人が何故か一人でロビーにいた。

「こんにちは。今いいですか」

良子は、支配人がいいとも悪いとも言わないうちに彼に向かい合って腰掛けた。プー

ルガーデンのように高いコンクリートの塀はなく、そのうえここは二階なので、東側は江ノ島にさえぎられているが、西の方角は何処までも続く長い海岸線が心を伸びやかにしてくれる。常時穏かな支配人は、良子を見ても驚いた様子もなく何時もと同じ表情をしていた。夕暮れの海の風は殊更涼しい。風は灰色がかかった青い波の上を、遠い彼方から渡ってくる。風も海の色も長い海岸線も支配人の穏かな表情も何もかもが良子の心を和ませてくれた。

だいぶ人氣が少なくなつて来ているこの砂浜を眺めながら、良子はこれ迄の経緯を支配人に話した。が支配人からは、驚くべき言葉が返ってきた。良子が想像している以上に、支配人は何もかも知っていた。レジャー施設全体の支配人であるからには各施設の雑多な事柄を知っているのは当然と言えるが、それにしても何という事か。

「リリーさんの所のアルバイトの背の高い女の子が、手癖が悪いのは、事務所の者全員が知っているよ。知らなかったのはリリーさんだけだよ」

「えッ」

と言つたきり暫く物も言えなかった。ちよつと間をおいて

「何故知っていたんですか」

と言う問いに支配人は言った。

「会計係が計算していたら伝票の額よりきつちり三千円足りなかったことがあつたらしいんだ。そしたら、女の子が皺くちやにしてポケットに突っ込んである千円札を取り出してその中から三千円補充したんだって話だよ」

「そんなの、もっと早く教えてくれたっていいじゃないの」

「なかなか其処までは出来ないものだよ」

これでへばりついて来る女どもを追い払う事が出来るのだという安堵感がふつとよぎって体中が軽くなった。

「毎日千円札をぎくぎく盗られて損するのはリリーさんだけじゃないからね。うちの会社にとつても損失なんだから、明日の三時には行く必要はないよ。僕が全部処理して来るからね」

小田急への場所代は売上の二十パーセントと決まっている。支配人はその事を言っているのだ。暗いもやもやが消えて、明るい視界が広がったようなすがすがしさと消え去つた重み、良子は鼻歌を口ずさみたい気持ちでこの館を去つた。

良子にとって不条理な今回の事件は、支配人の僅かな一言で決着がつく事になるだ

ろう。良子はプールサイドの仕事が好きだった。意地の悪い副支配人さえいなければ、毎日が幸せだった。ふっと、子供の頃好きで何回も読んだ青い鳥を思い出しながら、今が青い鳥を捕まえた瞬間のような気がした。青い鳥はすぐに又逃げ去って行くだろう。

支配人は任された総てのレジャー施設を取りまとめていかなければならない。良子もまた小さいながら、小屋で働く僅かなアルバイト達を取りまとめなければならない。良子にとって今の支配人は有難い存在である。副支配人が権限を与えられていじめを楽しんだりリリーの小屋では盗人が活躍する。これは特別な事でも何でもない人間の姿だと認識しているのが妥当なのだろう。女っばいやりかただと嫌らしく思いながらも良子は支配人の力を借りずに副支配人と互角に戦う力はないのが、実情なのだ。人は置かれた状況の中で物を考え行動するものだ。立場が変わっても何一つ変わらない人間なんて居るだろうか。

その日もティールームすみれに行った。白い内装の店の棚に紫の桔梗が活けてあった。カウンターに腰掛けて、良子は独り言のように言った。

「人間の行為を美しいとか醜いとかって簡単に言えるものではないわね」

コーヒー色の液体にコーヒー茶碗のふちから静かにミルクを入れると白い液体がコーヒーの上に浮かぶ。スプーンでかき混ぜると、白かったミルクがコーヒーと混ざり合って徐々に混濁する。最後は白が消えてミルク入りコーヒーの独特な色におさまる。

「今日はいい事があったの」

すみれさんに声を掛けられてハツとした。

「ニヤニヤしながらコーヒーを見つめているじゃないの」

「そう、百万円稼いじやったの、人間ってお金に弱いものね。夏が終わったら奢るからね」百万円はオーバー過ぎる。が、大きく出すぎないと気持ちが悪くない心境でいる。遠からず又何かが起こるだろう。同じ繰り返しの中にも、夏のプールの仕事は決して嫌いにはならない。海も、太陽も、広々とした空とそれに続く水平線もみんな大好き、何時の日か、この世から消えて融け入るはずの良子の故郷。さあ明日も精一杯生きよう。